

芥川龍之介作

魔術

朗讀
前田敦子



芥川龍之介の略歴については「杜子春」の項を参照。

「魔術」は1920年（大正9）一月に「赤い鳥」に掲載された。「欲のある人間には魔術は使えない、あなた欲を捨てるのが出来ませんかと問われ、はい出来ます、と答えて魔術を習った男。ある日、友人たちに唆され、ついその魔術を使ってゲームで大勝ちしてまう」という話。人間の具有する“欲心”を見事に衝いた作品だが、創作だとは承知していても、つい、誰にでも魔術が出来るように思わせてしまうところに、芥川の構想と筆致の巧みさがあるといえよう。

「用語解説」

婆羅門（ばらもん） インドの四種姓（カースト制度）の最高位である僧侶・祭司階級

麝香（じゃこう） 香料の一種

荒肝（あらぎも） 荒々しい心

家作（かさく） 貸家

ある時雨しぐれの降る晩のことです。私わたしを乗せた人力車じんりきしゃは、何度も大森界隈おおもりかいわいの陰けわしい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪たけやぶに囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒かじぼうを下しました。もう鼠色のペンキの剥はげかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯ちようちんの明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標ひょう札さつがかかっています。

マテイラム・ミスラ君は永年印度の独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門ばらもんの秘法を学んだ、年の若い魔術まじゅつの大家なのです。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝腎かんじんの魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使って見せてくれるよ

うに、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

私は雨に濡れながら、おぼつか 覚束ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴よびりんのボタン 釦を押しました。すると間もなく戸が開いて、あ 玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出ですか。」

「いらつしやいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんはあいそ 愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出ででした。」

色のまつ黒な、眼の大きい、やわらか 柔くちひげ な口髭のあるミスラ君は、テエブルの上にある石

油ランプの心を撚しんりながら、元氣よく私に挨拶あいさつしました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、雨くらいは何ともありません。」

私は椅子いすに腰をかけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、壁かべ側ぎわに手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——ほかにはただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁ふちへ赤く花模様を織り出した、派手はでなテーブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目あらわが露あらわになつていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召使いの御婆さんが、紅茶の道具を持ってはいつて来ると、

ミスラ君は葉卷はまきの箱の蓋ふたを開けて、

「どうです。一本。」と勧めすすてくれました。

「難ありがと有う。」

私は遠慮えんりよなく葉卷を一本取って、燐寸マツチの火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊せいれいは、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉卷へ火をつけると、にやにや笑いながら、勾の好い煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話やわの

時代のこととでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使

おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠さいみんじゆつ術に過ぎないのでから。——御覧なさ

い。この手をただ、こうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の眼の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子いすをずりよせながら、よくよくその花を眺めましたが、確かにそれは今の今まで、テエブル掛の中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持って来ると、ちようど麝じゃこう香か何かのように重苦しい匂さえするのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆かんとんの声を洩もらしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作むぞうさにその花をテエブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様になつて、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなつてしまふのです。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供だま瞞しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入れましょう。」

ミスラ君は後^{うしろ}を振返って、壁側^{かべぎわ}の書棚を眺めましたが、やがてその方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交う蝙蝠^{こうもり}のように、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉巻を口^{くわ}へ啣^{くわ}えたまま、呆気^{あっけ}にとられて見ていましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び廻って、一々行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上げました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに最初来たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還^{かえ}って行くじやありませんか。

が、中でも一番面白かったのは、うすい仮綴^{かりと}じの書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落^{さかおと}しに私の膝へさっと下りて来たことです。どうしたのかと思つて

手にとって見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覚えがある、仏蘭西の新しい小説でした。

「永々御本を難有う。」
ながなが ありがと

ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。勿論その時はもう多くの書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまったのです。

「いや、兼ね兼ね評判ひょうばんはうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもありませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作ぞうさくなく使えます。ただ——」
と言いかけてミスラ君はじつと私の顔を眺めながら、いつになく真面目まじめな口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず

欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのはぶしつけ無^{ぶしつけ}駄^{ぶしつけ}だとも思っただけでしょう。やがて大^{おお}様^{よう}にうなず頷^{うなず}きながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えろと言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御^{おとま}泊^{とま}りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

「御^ご婆^ばサン。御^ご婆^ばサン。今夜ハ御^ご客^{きゃく}様^{さま}ガ御^ご泊^{とま}リニナルカラ、寢^ね床^{とこ}ノ仕^し度^どヲシテ置^おイテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉卷の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった後ののちのことです。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶楽部くらぶの一室で、五六人の友人と、暖炉だんろの前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽っていました。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくはりよう 獵の話だの競馬の話だのをしていました。その内に一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉だんろの中に抛りこんで、私の方へ振り向きながら、「君は近頃魔術を使うというひようばん 評判だが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前で使ってみせてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭をもた 寄せたまま、さも魔術の名人らしく、おうへい 横柄にこう答えました。

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師てじなしなどには出来そうもない、不思議な術を

使つて見せてくれ給え。」

「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛しかけもないのだから。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛さかっている石炭を、無造作むぞうさに掌の上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆あらぎもを挫ひしがれたのでしよう。皆顔を見合せながらうつかり側へ寄つて火傷やけどでもしては大変だと、気味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。

そこで私の方はいよいよ落ち着き払つて、その掌の上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工ゆかの床まへ撒き散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変つた雨の音が俄にわかに床の上から起つたのは。と言うのはまっ赤な石炭の火が、私の掌てのひらを離れると同時に、無数の美しい金貨になつて、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、茫然と喝采^{かつさい}するのさえも忘れていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮べながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。

「こりや皆ほんとうの金貨かい。」

^{あつけ}

呆気にとられていた友人の一人が、ようやくこう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思ったら、手にとって見給え。」

「まさか火傷^{やけど}をするようなことはあるまいね。」

友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとって見ましたが、

「成程こりやほんとうの金貨だ。おい、給仕、^{ほうき}箒と塵取りとを持って来て、これを皆掃き集めてくれ。」

給仕はすぐに言いつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、うずたか 堆く側のテエブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテエブルのまわりを囲みながら、

「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」

「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けられないような金満家になってしまうだろう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子いすによりかかつたまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起したら、二度と使うことが出来ないのだ。」

だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ抛ほうりこんでしまおうと思っている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合せたように、反対し始めました。これだけの大金

を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に抛りこむと、ごうじよう剛情に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾だこうかつという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたった所で、議論が干ひないのは当り前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌かるたをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するが好いい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡し給え。そうすれば御互の申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出に賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、いよいよあざけ嘲るような笑えみを浮べながら、私とテエブルの上の金貨とをず咬る

そうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちと骨牌かるたをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、折角せっかくの君の決心も怪しくなってくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」

「それなら骨牌かるたをやり給えな。」

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手もとでに、どうしても骨牌かるたを闘わせなければならぬはめ羽目に立ち至りました。

しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々いやいやかるた骨牌をしていました。が、どういふものか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌上手でもない私が、嘘のようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかつたのが、だんだん面白くなり始めて、ものの

十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌かるたを引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲まき上げるつもりで、わざわざ骨牌かるたを始めたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相けっそうさえ変るかと思うほど、

夢中になって勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金きんだか高だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、気違いのような勢いで、私の前に、札ふだをつきつけながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作かさくも、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまう。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの刹那せつなに欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、

折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手に入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐かいがあるのでしょうか。そう思うと私は矢も楯やたてもたまらなくなって、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九。」

キング
「王様。」

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ蒼あざになった相手の眼の前へ、引き当てた札ふだを出して見せました。すると不思議にもその骨牌かるたの王様キングが、まるで魂がはいったように、冠かんむりをかぶった頭を擡もたげて、ひよいと札ふだの外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、

にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨あまあし脚まですが、急にまたあの大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざぶ降りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌かるたの王様キングのような微笑を浮べているミスラ君と、向い合って坐っていたのです。

私が指の間に挟はさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、私が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間

だということ、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私は恥しさに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上ひじに肘をついて、静にこう私をたしなめました。